

反障害通信

19. 7. 18

81号

国家主義的扇動批判—欺瞞だらけの「徴用工問題」への「報復処置」

参議院選挙を前にして、いつものように「敵」を作りナショナリズムを煽るために、安倍政権は安全保障上で問題があるからと、優遇処置の取り消しという名目で、どうみても「徴用工」問題での報復処置でしかない行動にでました。問題なのは、意味不明のごまかしと欺瞞の極ともいえる主張をマスコミがちゃんと批判できず、ナショナリズムにとりこまれていることです。

輸出規制処置は、安全保障上の問題ということで、「北朝鮮」への脅威論とリンクさせて、核や化学兵器に転用できるという話をしています。そもそも、もう核開発は進んでいるので、その核開発云々という話はおりません。化学兵器のサリンとかVXガスとかいうことを出しているのですが、そもそもオーム真理教が民間で作っていたものを秘密の技術とする意味が分かりません。そもそも、「北朝鮮」の方が、日米安保の方の脅威で、武力によって政権を転覆されるという脅威で核開発を進めていたのです。そもそもそもそもグローバリゼーションに突入した時代に、植民地支配などという事が何も利益をもたらさないということで、「攻めてくる」ということはありえないのです。それにそもそもわざわざ化学兵器など開発する意味はないのではと思います。

もうひとつのおかしな話は、「徴用工」問題で、日本政府が繰り返し主張している、「1965年の日韓条約で解決済み」という話です。そもそも日韓条約は朴軍事独裁政権の時代に民意とは関係なく、しかも「東西の冷戦構造」の中で、アメリカが北東アジアの安定化のためにと韓国に圧力をかけて結ばせた不平等条約なのです。さらに、「解決済み」ではないことの証左として、「従軍慰安婦」問題で村山連立政権時代に民間基金を設置し、また朴の娘の大統領時代にも、安倍政権の下で更に追加処置をなしました。

更にもっと肝心なことは、根本的な問題として、過去の反省と謝罪が未だにきちんとなされていないことがあります。「過去の不幸なできごと」というような文言でごまかし、侵略と戦争の国家責任をきちんとなしていない、戦後70年として出された安倍談話なるものはごまかしに満ち満ちています。(これへのわたしの批判は

https://docs.wixstatic.com/ugd/6a934e_456e935796f649c69042dd0690c1cfae.pdf)。

そして、与党政権幹部から、「侵略ではなかった、朝鮮の合意の下で統合されたことだ」とか(ドイツの第二次世界大戦時代にフランスのヴィシー政権を「合意の下に作られた政権」というのでしょうか、傀儡政権は民衆の合意の下に作られたものではありません。それと同じように傀儡的なところで欺瞞的な「合意」なることを形成したのです)、更に、「統合という事の中で、朝鮮もインフラの整備などで利益を得た」とか言い出す党幹部(閣僚)・麻生副総理発言も出ています。植民地支配の中で、一定のインフラ整備などはあります。

ですが、それ以上に植民地からの収奪があるのです(ヒトラーがアウトバーンを作ったからといって、戦争と数々の虐殺をなかつたことにはできないのです。そもそも麻生副総理から「ヒトラーの手法に学べ」という発言さえ出ています)。なぜ、植民地の独立運動が起きるのか(朝鮮では三・一独立運動などがありました)、植民地支配というものが何なのか、およそ政治のイロハ、歴史のイロハも知らない発言です。

侵略と戦争の批判と反省から、憲法九条が作られました。その改訂が自民党の党是だという発言も出ています。もしそうならば、自民党そのものが過去の戦争と侵略を何の反省もしていないということです。そもそも安倍首相自身が、「侵略の定義はいろいろある」とか、「侵略の定義は歴史学者にまかせる」(集団的自衛権での解釈はそれに 90%反対していた憲法学者に任せたのでしょうか?)とか、反省のかけらもない意味不明の発言を繰り返してきたのです。そもそも、自民党の中で、過去の戦争と侵略の反省がない発言がくりかえし出ていたことに対して、政権与党の責任において、きちんと処分してこなかったのです。だから、韓国の反日感情が根強く続いていたのです。また自民党と親密な右翼勢力からヘイト発言も出ていました。ヨーロッパで極右が勢力を伸ばしてきていますが、そもそも欧米のマスコミは安倍政権を極右政権と押さえています。アメリカの極右政権として登場し、人種差別発言他、差別主義者としてあらわになっているトランプ大統領との親密さを売りにしている安倍首相自身が、世界からどのように見られているのか、そのことをマスコミはきちんととりあげません。マスコミはトランプを笑いものにしていますが、世界の笑いものになっている自分の国の安倍首相をきちんと批判していないことによって、日本のマスコミもそして、日本の民衆も笑いものになっているのです。

韓国の文大統領下では関係改善はないとかいう発言がマスコミのコメンテーターから繰り返し出ていますが、そんなことを言う前に、むしろ安倍極右政権が、敵を作り上げて自政権の支持を得るといふトランプと同じ手法をとるむちやくちな政治を終わらせることこそが必要なのです。

安倍政治の根幹は、国家主義です。国家の利害を持ち出して他国を批判し、そのことによって自政権、自分の支持を獲得していく、そういう政治を国家という共同幻想から自立し、何が自分たち民衆の本当の利害なのかをきちんととらえ返していく、そこから日本の政治を民衆の手にとりもどしていかなくてはなりません。今回の、韓国政府と対立を煽っていく手法をきちんと批判していかなくてはなりません。(み)

(「反差別原論」への断章)(9)としても)

読書メモ

歴史研究、現時点ではロシア革命史関係の本。それから、予告していたように複線読書で、わたし自身の立場もある被爆二世の本。長年課題にしている「読みやすいとは何か」というところでの、「知的障害者」関係の本。そしてブログメモ 500 に合わせて、廣松さんの本の解説とジグザク的に読みました。

・和田春樹『ロシア革命——ペトログラード 1917年2月』作品社 2018

やっと歴史学習に戻ってきました。

ロシア革命というと10月革命ということに焦点があてられるのですが、著者は2月革命こそが大切だという主張です。2月はまさに自由を求めたブルジョア民主主義的革命ということだと思うのです。

専制ロシアの弾圧と、ロシアの王制のラスプーチンに関わる腐敗と、第一次世界大戦という戦争の混乱の中で、民衆の心がツアーから離れ、憎しみの対象になっていったところでの革命です。

それにしても婦人デーに合わせたパンを求めての行進から 兵士のまさに死を賭けた革命・反乱の闘いとして進み、ソロコフの兵士ソビエトという提起もあり、臨時革命政府と労兵ソビエトの結成というところから、二重権力的なことを生み出していく状況の中でのロシア革命の特異性があるのだと言い得ます。もうひとつ、この著者が押さえているのは、2月革命の時点ではボリシェビキはソビエトに余り積極的に関わっていない、もちろん民衆の次元のボリシェビキの労働者は、党を超えて関わり、そして総体としても、民衆の革命性が、ロシアのさまざまな政治グループの方針よりも、ラジカルな動きを見せていたということがあります。もちろん、この著の中でも繰り返し出てくる多くの保安部のエージェントが、かなり政党幹部まで入り込み、挑発的なことでその運動が陥る危うさのようなこともあったのでしょうが、インテリゲンチヤ的な前衛を、民衆は労働者は超えて進むということが、ロシア革命にはあったのだとも押さええます。それは一部暴力化したのですが、ロシア専制ツアリーズムへ対抗して起きた、闘いか死かというところでの運動の中でおきていたことです。

2月革命の死者への追悼のデモで、長年投獄されていて2月革命で解放されたナロードニキの印象的な演説でこの著書は終わっています。まさに革命は、名もなき多くの屍の上になりたっていく、その革命をどう継承していくのかということが問題なのだと思います。

和田春樹さんは、ロシア革命に関する著で国内外で有名なひと、反戦・平和というところでも運動をしていたひとですが、「従軍慰安婦」の民間基金あたりで、批判をうけていたひと、左翼的な関心からロシア革命史の研究をしているということではなく、反戦・反軍・平和、民主主義という観点からロシア革命をとらえているのです。

それにしても膨大に資料に当たり、そこに登場してくるひとたちの性格とか主張とかを押さえ、分析を進めています。そもそも歴史資料というのは、資料を残したひとの主観とか、そのひとの立場による自己合理化の中で歴史的事実をねじ曲げて書き残す、インタビューに答えたのを起こした文とかもあり、そのことをこの著者はかなり大胆に分析し、「歴史の真実」を探ろうとしています。

ロシア革命に関する資料は膨大にあり、わたしはわたしの関心に照らして、押さえておくだけにしかならないので、先を急ぎます。

この著は冒頭に書いたように、2月革命の方が大切だというところで書かれています。ですが、それだと、フランス革命や1848年革命や、もろもろの革命から、ロシア革命の特性をどう区別して押さえるのかは出てきません。わたしの関心は、10月のソビエト革命と

そこから、著者のいう「レーニンの第三革命」へ至ったのか、そして理想社会の実現を目指した革命が、党の独裁からスターリンの大粛正にまですすんだのかという分析が必要だと思っています。

この著の中でも出てきますが、2月革命のときから、民族問題での要求が出ています。多民族国家としてのロシアが抱えていた民族問題のみならず、他の差別の問題もとらえかえすというわたしの観点から、ロシア革命の読み解きは進みます。

ケレンスキーの死刑制度反対とか、女性の普通選挙権要求とそのときに出てきた女性からの批判発言など、レーニンの「差別とは階級支配の道具である」という論自体への批判など、さまざまな問題をすでに指摘できます。

たわしの読書メモ・・ブログ 498

・森川聖詩『核なき未来へ：被爆二世からのメッセージ』現代書館 2018

映像鑑賞メモで書いたコミュタンの放射線に関する情報の歪曲のひどさに怒っていて、自分自身の被爆二世という立場でちゃんと活動をしていかなくてはと、被爆二世に関するインターネット検索をしていて、ヒットした本です。

著者はお父さんが広島の実験被爆者、原水禁運動をやっていたひとです。子どもの時からさまざまな体調不調で苦しんで、そして不安の中で生きてきたひと。それで、いろんなことを断念していったり、また、逆にそれでいろんな体験をしていったひとです。アメリカに留学しその中での出会いの中で観点を広げ、そしてそこでの繋がりから、部落差別、狭山事件に関心をもち、帰国後部落解放研究会に参加し、また、関東被爆二世連絡協議会を立ち上げ、全国準備会も作りながら、政府のごまかしの「原爆被爆者二世の健康に関する調査研究」に反対して、ハンストまでやったひとです。

体調不調の人生を自伝的なことで書きつつ、父親との確執と和解やいろんな出会いの中で、幅広い観点をもつようになっていくひとです。単に原爆の問題だけでなく、核被害の共通性というところから反原発の運動や再生エネルギー関係の運動にも関わり、核廃絶、原発ゼロ、被害者支援・ほしょう(補償・保障というところで、ひらがなで書いています)。ということセットにした活動を訴えています。また、「唯一の被爆国」という欺瞞を書いています。まさに国ということに留意して、この間の、政治の動きもきちんと押さえて批判をしています。まさにそれはわたしの的に書き足せば「国家主義的政治の批判」なのです。それは、ウランの採掘や、被曝労働、そして事故による被害、避難者の切り捨て、核は差別なしにはありえないということをきちんと提起してくれています。

もうひとつ、差別の問題を押さえてきたわたしの立場からして、「準坵粹」322P という概念を突き出していることに留意しました。これは、わたしのマージナルパーソン研究ともリンクしていくのですが、なぜ、ごまかしの政治が続いていくのかをとらえ返したとき、自分が置かれている立場がどこにあるのかということ、きちんととらえられない中で、別の集団、枠組みから、自分が差別することによって、自分の被差別の立場をスポイルして優越感に浸っていく、そのようなことを孕んだ概念です。

そのような幅広い観点から、自分の被爆二世の問題もとらえ返し、そして最後に自分が

現在関わっているいろんな運動を紹介しつつ、この本を読んだひとたちへ、それぞれの立場から運動に関わる、起こしていくことを提起してくれています。遅読のわたしはかなりスピード読み切りました。わたしの、そしてわたしのきょうだいの二世としての体験と重なることもあり、今後、わたしも改めて自分自身の二世問題をとらえ返し、新しい動きをしていこうという思いを抱きました。

たわしの読書メモ・・ブログ 499

・ジョン・リード／原光雄『世界をゆるがした十日間〈上〉〈下〉(岩波文庫)』岩波書店 1957

アメリカの社会主義者でジャーナリストの著者が、ロシア 11 月革命(グレゴリー暦、一般にロシア暦で「10 月革命」といわれています)の時にロシアで取材して書いた、古典的に有名なドキュメンタリー的記録です。絶妙な筆致で、その状況が、まるで映像を見ているかのように浮かび上がってくる記録です。

この著は有名で、いろいろ動き始めたときから読まなければと思っていて、ずーっと前に買っていたのですが、一回紛失し、また買い求めたりしていた本、それでも積ん読してしまっていたのですが、やっと読めました。大体の内容はロシア革命史関係に触れる雑誌の論文の中でつかんでいたこともあったのですが、改めて読み進める中で、ロシア革命とはなんだったのかが分かっていきます。そして抑圧されてきた民衆の怒りとまさに生きることを求める闘いが革命へとつながった流れをつかむことができました。実は、トロツキーの『ロシア革命史』を読んでいたときがありました。文庫で最後の巻を読んでいる途中で喪失し、読破していなくて、改めてこの本の後に読んでいこうと思っています。その『ロシア革命史』の中でつかんでいた文そのものでなく、内容的につかんでいた有名なフレーズがあります。「民衆が革命を起こすのは革新的だからではない、保守的だから革命を起こすのだ」ということです。ロシアはツアリーの圧政の中で、まさにパンと平和と自由と土地を求める闘いとして始まったのです。

レーニン、トロツキーの状況をつかんだ柔軟な戦術と、しかし、機をのがさない、敵を打ちのめす戦略とによって、かなり強引になされた革命で、おそらく他の指導的に動いていたボリシェヴィキーの知識人たちが革命の敗北を予感しつつ、動いていた中で、民衆のエネルギーに乗り、引き出し、信頼を獲得することによってなされた革命と言い得ます。その機を見る、機を逃すなということは、次の文の中に現れています。

「もしも社会主義なるものが、全民衆の知識的発展がそれを許容する場合にだけ実現できるものならば、われわれは少なくともここ五百年間は、社会主義を見ることはないであろう。」 下 137P

「ボリシェヴィキーの成功の唯一の理由は、ボリシェヴィキーが人民の最低層の広大にして単純な要求を成就させ、かれらに呼びかけて旧いものを引き裂き破壊する仕事をおこなわせ、次いで崩れ落ちる廢墟の煙のなかで、かれらと協力して新しいものの骨組みをうちたてた点にあった。……」 下 124P

ロシアは当時は識字率が低く、この本の著者は「人民委員会」の通行書を取って活動していたのですが、兵の中にはそれを読めないひとも多く、スパイと疑われて危うく銃殺さ

れそうになったということも書かれています。労働者、兵は感情的な流されることはあっても、レーニンやトロツキーの民衆の心に届く演説を吸収し、支持し信頼していく、あやうくどちらに転ぶか分からない中での、要所要所での的確な情况分析と、引きつけるわかりやすい演説で鼓舞し革命へと進んだのだと言い得ます。もちろん二人だけではない、オールド・ボリシェヴィキーや名もなき民衆的に動いたボリシェヴィキーの存在もあったのだと思います。

ロシア革命は、労農兵のソビエト革命と言われているのですが、2月革命はボリシェヴィキーの主導性は弱く、労と兵の民衆のエネルギーが先行しつつも、農も地域で文字通り命をかけた一揆的な打ち壊しや土地収奪を進める動きもあったのですが、農は社会革命党の影響下にあり、そして統一的な動きにはなっていません。10月になって一気にボリシェヴィキーの労が平和を求める兵と連携し、レーニンたちの武装蜂起の計画より先行し、ほとんど無血で動きはじめ、反革命の動きの中で、一部抑圧された者の感情的なエネルギーの突出としての暴力性はあったものの、躊躇するなどという革命の鼓舞があった中でも、極めてでこぼこの動きの中での混乱の中でも、冷静な情况分析と行動として革命が進んでいき、最後は農民を主導していた社会革命党左派のソビエトへの取り込みの中で、10月革命は勝利します。さて、その後は、レーニンの第三革命と言われることで、白軍との戦争、そして世界革命としての敗北の中で、ボリシェヴィキーのプロ独という事態に進みレーニンの死の中でスターリンの一国「社会主義」建設と粛正に進んでいくのですが、そのあたりの総括が最も肝要なことです。

この革命は20世紀初頭のツアリーの压制下での革命です。そのことを押さえた上で、レーニン主義と言われていることの総括の中から、21世紀の社会変革の方針はとらえられるのだと思います。

いくつかの留意すべき点

ボルシェビキはプロレタリアの党ということ。農民の組織化をなしていないなかで、レーニンの第三革命で党の独裁的に進んでしまったこと。

レーニンの演説として「ロシアの現政府がボリシェヴィキー党によって形成されていることは、何びとも否認しないであろう。一」「われわれボリシェヴィキーは、プロレタリアートの党である」下131P

民族問題がつねに意識されていたこと、大ロシア人は半数以下ということもありました。声明文の中では繰り返しユダヤ人への虐殺の懸念が出てきますし、被抑圧民族者の立場での発言がいくつも出てきます。しかし、結局革命の中で、農とともにきちんと位置づけられない中で、その反差別のエネルギーを組織化できなかった、ということもあったようです。

今回は簡単な内容を押さえた切り抜きメモを残します。

上

ブルジョアジーは時には工場を破壊しても、将校は兵士を殺しても反革命を進行する 42P

代表選出はいつも民意の反映は遅れる 114P

パンと平和と土地と自由のスローガン

革命の波及の期待 189P・・・レーニンやトロツキーは世界革命の必要性をとらえていた
インテリの革命ではなく、民衆は党を超えて行動する 193P

農民ソビエトの離脱 207P

「都市、地方、全前線、全ロシアのあらゆる兵營でくりかえされつつある、かかる闘争を
想像せよ。連隊を見守り、あちこちに急行し、議論し、脅迫し、懇願する不眠のクルイレ
ンコたちを想像せよ。・・・ロシア革命とはかかるものだったのだ。……」 228P

民衆が主導的に動いた革命 上からの指示ではない 235P

下

入り乱れた混乱

何回も出てくる「汚らしいひと」という表記・・・翻訳の問題？「汚れた(まま)」と書く、
訳するところ

共同葬儀という右派の認識のずれ 78P

僧侶のいない葬儀 87-8P

ドゥホニン ボリシェヴィキーの勝因 124P

前衛党論 137P

訓示 268P

暴力性の否定の否定・・・防衛的暴力と機会を逃すことがすぐ起きてくる、そして長く
続く大きな被害につながる時の暴力

いろいろ書いたのですが、歴史研究の本の読後直後のメモは過程的なメモです。後で深
化してまとめますー

たわしの読書メモ・・・ブログ 500

・熊野純彦「解説—揺れ動く時代のなかで—廣松哲学の背景をめぐって」(熊野純彦編『廣
松哲学論集』平凡社 2009)

著者が編んだ廣松の哲学の「入門書」525Pとしての論集につけた解説。この論集は「入
門書」というより、廣松哲学の基底論集という方が適切かもしれません。これを読んでも
廣松さんの本を読んでいないひとには理解不可能です。廣松さんの本を一応だいたい当た
って、改めて廣松哲学を押さえていく作業としての入門書にはなるかもしれません。本文
を読んでから、もしくは解説を読んで、本文を読んで、解説に戻ってくることなのですが、
この論集に収められている論考はわたしは一応全部読んでいます。わたしの最後の学習と
して廣松さんの著作の読書メモを残していく作業をするので、その学習をするときに、最
初に「入門書」的にこの論集を読むことにします。ここでは、ブログ 500 の記念に、解説
だけ読んでおきます。

熊野さんは、哲学の総体的学習をし、これほど総体的に哲学を押さえているひとはいな
いだろうという希有のひとです。廣松さんが自分の哲学の継承者として期待をかけていた
ひとです。ですが、熊野さんは倫理学に走っていて、廣松さんの生前はズレを生じていま
した。ここのところ、『資本論』関係の本も出し、何か廣松さんの継承的な動きも見られま

す。

この解説は、廣松さんの人生をそのときどきの運動の歴史と重ね合わせながら、廣松さんの論考の展開を追うという形での解説です。廣松さんの伝記的な本やインタビューなどはかなり出ていて、ほとんど読んでいたので、今回のこの解説で初めて知ったこと、ひよっとしたら他にも書かれていたけれど、記憶をなくしているだけかもしれません、書き置きます。

まず、わたしは、廣松さんは60年安保以前に、アカデミックな世界に集中していったと思っていたのですが、それなりに運動にも関わっていたと知りました。安保の時「大衆運動が起こっているときにそっぽを向くなんてことは絶対しない」549Pとしてデモにも参加し、その中で「死ぬ気のないやつは来るな」550Pとか発言していたようです

大学院博士課程のときに、「大管法（大学管理法）闘争を目前にして、東京大学全院生協議会の議長になった。」555Pとあり、また、『ドイツ・イデオロギー』の編集問題で、「現行版『ドイツ・イデオロギー』は偽書に等しい。」として新しい編集提起をしたのですが、その過程で疎外論から物象化論への転換を主張していて、「廣松の苦闘は、政治闘争の様相をも帯びてくる。」560P、これは、他の論考でも書かれていたのですが、端的には革共同の疎外論批判という内容をもっていたようです。また、いろいろと革命運動について語り、文を引用する形で「曰く、蜂起は断じて弄んではならぬ。だが、一たん蜂起の途に就いた暁には須らく最大の決意をもって敢行し、攻撃の態勢を堅持せよ。守勢は武装蜂起の死であると知れ。」569Pというような文を書いています。ロシア革命時のレーニンやトロツキーの言動を想起させる文です。ボルシェビキズムの検証こそが必要なのですが、オールド・ボルシェビキズム的な革命への思いを持ち続けていたのでしょうーまた、これは初耳だったのですが、どこから襲撃を受けたか分からないままに「おなじ年（70年）の五月に、廣松はテロに遭い、・・・」569Pとあります。

哲学的なところでは、「レーニン流の模写説」を批判し548Pとか、「廣松はまず、自己疎外概念が「特別な主体概念」（ヘーゲルにおける「精神」シュトラウスの「人類」、パウアーの「自己意識」、フォイエルバッハの「類的存在」と「不可分」であるしだと確認する。」ということを書いています。

この解説で、本文ひとつひとつが廣松さんの論考のなかでどう位置づけられるのかを時代を追って書いています。それについては、本文の読破ー再読が必要になります。最初に書いたようにそれは、わたしのライフワークのひとつの最後の作業として読み込む中で、読書メモを残すことにします。

たわしの読書メモ・・・ブログ 501

・打波文子『知的障害のある人たちと「ことば」——「わかりやすさ」と情報保障・合理的配慮』生活書院 2018

図書新聞で書評が掲載された本です。わたし自身情報発信者として、わかりやすさを求めている立場で、また、手話に関わって、情報保障とコミュニケーション保障にわずかなりとも関わったり、考えている立場で、関心をもって読みました。

「知的障害者」への情報保障やコミュニケーション保障ということが取り残されているという著者の指摘がこの本の核心です。

ユニバーサルデザインの思想ということがあり、みんなにわかりやすい情報なり、伝達をという考えがあるのですが、「できるだけみんなに」ということは必要ですが、「みんなに」ということはあり得ないから、この本にも出てきますが、個々にきちんと対応しているということになっていっています。

この本が主にしているのは著者のいう「軽度」「中度」の「知的障害者」です。これも著者のいう、もっと「重い」というところで、1章のことばというところで、絵カードという話が出ていましたが、絵カードの言語的使用ということも考えられるのではと勝手にしていました。

後半の実践的なところでの分かりやすさの追求というところがすごく参照になりました。わたしも今後、自分なりに再度煮詰めつつ、つかわせてもらおうと思っています。

さて、この本でも「障害の社会モデル」ということばが出てくるのですが、「障害の社会モデル」を巡る混乱が、ここでも如実に表れています。「社会モデル」にはオリバーに現れるイギリス障害学とアメリカ障害学があります。端的な言い方をすると、障害者が障害を持っている」という個人モデルー医学モデルを反転させたイギリス障害学の「社会モデル」は「社会が作った障壁が障害である」というとらえかたです。これはそれまでの障害観を反転させた、パラダイム転換した内容をもっていたのです(きちんとした転換をなしきれなかったもので、その後の混乱がおきてきたのですが)。そこでは、そもそも「障害のある人」という言い方はできません。権利条約もそのもとになった、ICFもアメリカの「障害の社会モデル」でしかありません。そもそもイギリスの「社会モデル」にたてば、第1章の、まさに医学モデルでしかない、「知的障害の分類」などでできようがないのです。もし、現在社会の医学モデルで「知的障害者」いかに分断されているのかを参照するためになら、註とか、資料として書くことはあるのでしょうか。

さて、後は切り抜きメモをとりあえず残しておきます。

補助・代書コミュニケーションという医学モデル 20P

手話の補助手段的とらえ方 21P・・・？

「社会モデル」のとらえかた 24-7P・・・アメリカ障害学の「社会モデル」

第一言語第二言語、音声言語を第一にしている？28P

クレーン現象・・・要求の指示 36P

言語的能力 37P・・・そもそも言語とは何か？

条件反射的語の表出、絵カード的言語、象形文字

著者の「社会モデル」のとらえかた 37P・・・？

情報保障 48P・・・情報公開、広報義務、「**「基本的人権」に基づく対等な人権の保障**

——民主主義の基底、基本的理念の獲得

支援以前の問題 52P・・・抑圧と力を奪う

ファクシリティッド・コミュニケーションFC支援 53-4P・・・筆談支援

プリント・ディスプレイ 59P

スウェーデン政府の「民主主義や正義を実現する上で重要な課題」 61P

医学モデル的なテスト形式 69P

ひらがなのわかりにくさ 分節で行を変えない 69P

ローマ字、カタカナ、漢数字はわかりにくい 70P・・・漢字仮名交じり文の二面評価？

ユニバーサルデザイン 100-3P・・・ひとつのユニバーサルデザインということではない、
個々のニーズ

意思形成支援（情報保障、情報の解析、・・・）—意志決定（意思疎通、意思表示、意思
実現） 109P・・・論理的に分かる—感性的に分かる

支援者の抑圧 120P

ひと一言語を用いる者という規定 118P・・・？「言葉を使えない者はひとではない」と
いう論理

「わかりやすい」ということ—資料、障害理解 122P

スローコミュニケーション 122P

「障害者が生きやすい社会はみんなが生きやすい社会である」—「わかりやすい」とい
うことでの援用 123P・・・ただし、ユニバーサルデザインの画一性是有り得ないという問
題も、学者の論文とか・・・

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 029

・ドミトリー・メスキエフ「バタリオン ロシア婦人決死隊 VS ドイツ軍」2015

これはテレビの有線放送で見たのですが、テーマは、第一次大戦下で、男性兵士の差別
の中で、愛国心を発揮し祖国を救うために闘う女性兵士部隊ということなのです。見てい
て愛国心のようなことや戦争ということ自体の差別性の批判はしていましたが、性差別と
いうところの問題で、何かもやもやした思いをもっていました。ですが、丁度ロシア革命
関係の文書を見ていると、当時の状況と、この「婦人部隊」の話がでてきます。要するに、
ロシア軍が補給もままならず飢餓も出てくる中で、ドイツ軍と「交歓」の中で停戦状態を
作り出しているときに、この「婦人部隊」が軍上部の命令で戦争状態に突入する、差別的
なとされる男性兵士たちは、スト的に停戦状態を作り出していたのに、「婦人部隊」がスト
破りを担ったという話なのです。後にこの「婦人部隊」は10月革命の時に、ケレンスキー
の反革命政府を擁護するために冬宮に駆けつける部隊として現れます。

このことから、湾岸戦争時に、アメリカの女性団体が「女性兵士を前線に配置しないの
は性差別だ」と告発していて、そもそも戦争という差別の極的なところで、性差別がその
ようなところにとりこまれ、被差別者同士が対立させられていく構図が出ていました。

この映画も、そのような構図の一端なのです。ですが、映画監督はそのようなところを
押さえて作っているとは思えず、わたしも最初観たときにはそのようなところがきちんと
押さえられなかったのです。差別の問題は、きちんとそれぞれの立場を押さえたところ
での総体的とらえ返しが必要なのだと、つくづく感じました。

社会変革への途(1)

(はじめに)

2015年の戦争法(安全保障関連法)への反対運動の中で、委員会での強行採決の後、本会議の採決の中で、「民主主義は死んだ」という声があがっていました。ですが、「死んだ」としたら、それは間接民主主義—国会で、むしろその反対の直接行動は、2012年の脱原発—反原発の官邸前行動、国会周辺抗議行動へと進み、特定秘密保護法反対の運動がかつてない新しい形態の運動として起きてもありあがっていました。という中で、戦争法案反対の国会前での毎週金曜行動が、最後は連日の直接行動、それは最大12万人もの結集があり、直接民主主義の運動はむしろ盛り上がっていたのです。しかし、法案は通り、その直接民主主義の運動を、参議院選で過半数をとることによって廃案にするという方針で、間接民主主義へ放りなげてしまいました。その主催者は、「普通」の学生で、終わりの方から「生活保守」を標榜し始めました。その若いひとたちはよく頑張ったのです。問題はむしろ前の世代が作り出した、「社会は変わらない」という風潮だったのです。若者の保守化が言われています。日教組の解体攻撃から、日の丸・君が代の強制、愛国心教育の取り入れ、労働組合のストを打てる組合は正当な組合運動自体が刑事弾圧の対象になり、学生運動は多くの大学で立て看さえ禁止される状況になり、そして、産学共同の流れの中で、学解体的なことも進み、大学教員の身分さえ危うくなり、左翼的なことをいうマルクスのことを学の中にとりいれると就職できなくなる状況になり、リベラルな学者も「資本主義はなくならない」「市場経済はなくならない」ということを言い出す状況です。それでは、そもそも社会の分析から問題を掘り下げていく作業さえできなくなるのに、です。いくらかなりとも期待をもった民主党政権は早々と崩壊し、以後、政権与党が得票率は過半数を割っているのに、軽く過半数の議席を確保するという状況が続いています。投票率は低下し、特に若者の投票率が低くなっています。「社会は変わらない」という風潮に支配されていくのです。

今、必要なのは、「社会はいかなる途からも変え得る、変える途はある」というメッセージです。ということで、この連載に入ります。

以下、大枠の提言のもくじ的内容、随時いろいろ考えを織り込みつつ変えていきます。

瀕死の議会制民主主義—間接民主主義の救命

情報・コミュニケーション・アクセス保障と情報隠蔽・歪曲処罰法の制定

三権分立の確立

民意を反映しない選挙制度の改革

地方分権、被差別当事者による「拒否権」の確立

間接民主主義から直接民主主義へ

インターネット投票の波及と国民投票の拡大

国会の政策集団化

国家という共同幻想からの自立

下からの国家を超えるネットワークの確立
軍をなくすとりくみ
国家主義・ナショナリズム批判と国境を越える民衆の連帯
「構造主義革命論」の見直し
地産地消運動と協同組合運動
産地直送運動と民衆の生産と消費のネットワーク
労働組合運動と労働組合による生産管理
反差別共産主義論の確立
過去の「共産主義運動」の総括
国家の解体のために
反差別共産主義論の確立と反差別運動のネットワークの推進

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 81 号」アップ(19/7/18)
- ◆ホームページをリニューアルしました。協同作業を追求してきたのですが、うまく進められず、別にあきらめた訳ではないのですが、論的な深化にウエイトをおきます。
- ◆トップページの I に「ホームページの見方・検索の仕方」という項目を作り、アクセスしやすいようにしました。まだ、工事中です。「アーカイブ」を大幅更新しようとしています。もう少し時間がかかります。サブホームページ「反差別資料室 C」の文献表をアクセスしやすくし、「反障害-反差別研究会」のメインホームページとリンクできるようにしています。だいたいの作業は終わったのですが「アーカイブ」がまだです。新しく購入した本、読書した本は随時追加していきます。

(編集後記)

- ◆月刊を続けています。やっとコンパクトにできました。
- ◆前回予告していた巻頭言、「金融庁へ諮問された報告で、老後の生活で二千万円足りないとかいう試算の隠蔽」の話。実は簡単な話で、「足りないひとには、最後のセフティネットとしての生活保護がある」と言えすむ話なのです。ところが、生活保護の補足率が 20～30%台と言われている状況です。しかも、それさえ切り下げしているのです。安倍政権は、憲法改正と安全保障、実は戦争ができる国作りに一生懸命で、もうひとつの生活の安全保障を危うくしています。そもそも、もし国というものが必要としたら、戦争をしない、戦争をなくすことと福祉というところに、存在意義があるのです。福祉を切り捨てたら、国家という共同幻想が崩壊するのです。今回の、急遽書いた、韓国への「報復処置」、安全保障を名目にし、まさに、国家主義的に敵を作って攻撃し、極右的な自政権の支持を得るといふ、まさにトランプと同じ手法なのです。同じごまかしの手法がいつまで続けられるのでしょうか？

◆「読書メモ」は、今回は複線的学習、歴史学習を軸に、気になっている本を随時読み込んでいきます。

◆映像鑑賞メモは、第一次世界大戦の時に作られた、「ロシア婦人部隊」の話、たまたま観ていて気になっていたら、ロシア革命の学習とリンクしました。差別の総体的とらえ返しの必要性として押さえ直しました。

◆今、実は社会変革を求める動きが潜在的に出てきているのですが、受け皿がないのです。で、少なくとも「いかようにも社会変革はなしえる」というメッセージを出していく必要性を感じています。「反差別論原論」への断章」の中のシリーズとして「社会変革の途」の連載を始めます。最初は、「はじめに」とだいたいイメージを出してみました。

反障害—反差別研究会

■ 会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこととらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

■ 連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>